

第4巻1号 2022年3月

秀明大学看護学部紀要

Journal of Faculty of Nursing

資 料

基礎看護技術演習の教授方略の工夫に関する文献検討

村越 望

 秀明大学看護学部

Shumei University Faculty of Nursing

資 料

秀明大学看護学部紀要
P.21-29 (2022)

基礎看護技術演習の教授方略の工夫に関する文献検討 Literature Review on Devising Teaching Strategies for Basic Nursing Skills Practice

村 越 望¹⁾

Nozomu Murakoshi

要 旨

目的：第4次改正カリキュラムとなった2009年以降に看護系大学において行われた基礎看護技術演習の教授方略の工夫について文献検討により明らかにすることを目的とした。

方法：医中誌にて、「基礎看護技術」「演習」「大学」をキーワードとし、2009年から2021年を条件として文献検索を行った。基礎看護技術演習での教授方略と、そのねらいと効果・課題を抽出した。さらに教授方略のねらいを類似性に基づいてカテゴリ化した。

結果：演習の教授方略のねらいが明確な27件を分析対象とした。その結果、5つの<カテゴリ>(文献数)に分類された。<看護技術の実践への応用>(12件)<看護技術の修得>(6件)<主体的学修>(4件)<看護へのモチベーション>(3件)<実習のレディネス>(2件)であった。

考察：5つのカテゴリの教授方略のねらいでは、模擬患者や看護師の教育への導入など看護実践場面のリアリティと看護へのモチベーションを高める工夫がなされていた。オンラインツールを活用したブレンディッドラーニングや事前事後課題を設定した授業設計などにより自ら学ぶ力の育成に取り組んでいた。一方で、教員の教授方略に関する準備不足の一面が示唆された。

キーワード：第4次改正カリキュラム、看護基礎教育、基礎看護技術、演習、教授方略

Key Words：the fourth revised curriculum, basic nursing education, basic nursing skills, practice, teaching strategies

I. 緒言

近年、我が国において看護系大学は飛躍的に増加しており、看護師養成教育としての社会的役割が大きくなっている。しかし、今日、患者の人権への配慮や、医療安全確保のため、実習で学生が経験できる看護技術や機会が制限され、卒業直後の看護師の技術能力と臨床現場が期待している能力との乖離が大きくなってきているとされる¹⁾。看護技術とは、看護の専門的知識に基づいて、対象の安全・安楽・自立を目指した意図的な直接行為であり、実施者の看護観と技術の修得レベルを反映するとされる²⁾。対象者の日常生活援助や診療の補助が主な行為であり、看護基礎教育では、技術修得を目指した教育が求められている。とりわけ

実習で実際に対象者を援助する行為は何事にも代えがたい貴重な経験となる。

このような状況下において、2022年度から施行のカリキュラムでは地域医療構想の実現や地域包括ケアシステムの推進し、多様化かつ複雑化する対象者のニーズに対応できる学生を育成する内容となる³⁾。また、基礎看護学では、臨床判断能力や看護の基盤となる基礎的理論や基礎的技術、看護の展開方法等を学び、シミュレーション等を活用した演習を強化する内容となり、1単位増となった。基礎看護学の演習の強化については、第4次改正カリキュラムにおいて臨床実践に近い状況を想定した学習ができるよう演習の強化が示されていた⁴⁾。

演習とは、座学や一斉授業では修得困難な教育内容に対して用いる多様な教育方法⁵⁾とされ、看護技術修得に欠かすことはできない授業形態である。2004

1) 秀明大学看護学部

1) Faculty of Nursing, Shumei University

年から2010年に発表された基礎看護技術教育研究の調査によると⁶⁾、約4割を演習の研究が占めていたことから、基礎看護学領域において、効果的な演習のあり方が広範に、継続的に探究されてきていることがわかる。

そこで本研究では、2022年度施行のカリキュラムに見合う基礎看護技術演習の効果的な教授学習活動のあり方を検討するために、2009年から2021年の第4次改正カリキュラムで実践されている演習のデータを収集・整理し、基礎看護技術演習の教授方略の工夫を明らかにしていくこととした。

II. 研究目的

第4次改正カリキュラムが施行された2009年以降に看護系大学において行われた基礎看護技術演習の教授方略の工夫について文献検討により明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1. 対象文献の選定

医学中央雑誌 Web 版をデータベースとして用いた。(基礎看護技術/AL) and (演習/AL) and (大学/AL) をキーワードとし、会議録を除く、検索年を2009年から2021年を条件として文献検索を行った。抽出された文献の表題・抄録・本文を精読し基礎看護技術演習以外の演習を含む研究、研究対象が大学生でないもの、演習内容についての研究でないものは除外した。抽出された文献から、①調査が2009年以降に行われている、②教授方略とその方略を用いたねらいが読み取れることを基準として文献を選定した。

2. 分析方法

対象文献を精読し、基礎看護技術演習で行われた教授方略とその効果と課題を抽出した。さらに抽出された文献からその教授方略を用いたねらいを抽出し内容の類似性に基づいてカテゴリ化することで教授方略の工夫を検討した。

IV. 結果

1. 概要

文献検索の結果、27件を分析対象とした(表1)。演習での教授方略のねらいとして集約されたカテゴリは<看護技術の実践への応用>、<看護技術の修得>、<主体的学修>、<看護へのモチベーション>、<実習のレディネス>の5つであった。

これ以降の記述では、教授方略のねらいのカテゴリを<>、サブカテゴリを<>>で、文献番号を()で表す。

2. <看護技術の実践への応用>について

<基礎看護技術の個別性への適用>を教授方略のねらいとした文献が7件、<現在の看護実践の場の理解>が2件、<現在の看護実践の場の理解>と<基本手技の習得>の両方が1件、<基礎看護技術の個別性への適用>と<現在の看護実践の場の理解>の両方が1件、<臨床実践に近い状況での知識・技術、思考、判断の統合>が1件であった。

<基礎看護技術の個別性への適用>を教授方略のねらいとした演習では、事例を基に援助を実施する演習、複数の看護技術項目で共通の一事例をチームで展開する演習、ロールプレイによる演習、模擬患者を用いたシミュレーション演習が行われていた。

事例を基に援助を実施する演習の効果として、学生が、援助を受ける対象の状況を捉えて援助を考えられるようになっていた(26)。さらに複数の看護技術項目で共通の一事例をチームで展開する演習では事例を繰り返し振り返ることで、対象やその家族まで容易にイメージでき、対象を「人」として捉えて状態に合わせた看護技術を考える効果があるとされていた(18・19)。

ロールプレイによる演習の効果として、看護師役と患者役に分かれて行うことで患者の気持ちを理解することができ、個別性のある看護技術の必要性を気づかせることができた(21)。さらに、観察役を置くことで客観的に実施手順やその内容が評価でき、説明や方法が妥当であったのか学生の視点で気づくこともできていたと報告されていた(23)。

模擬患者を用いたシミュレーション演習の効果として、模擬患者が参加することで学生同士でのロールプレイでは得ることが難しい実践的な学びが得られ、さらに模擬患者の経験が語られることによって、学生が模擬患者の心情に近づき患者の様々な心情を推察するなどの臨場感ある学びが得られていた(22)。

<現在の看護実践の場の理解>を教授方略のねらいとした演習では、看護師参加型の演習が行われていた。実際に臨床で働いている看護師が演習に参加することで、学んでいる看護技術を臨床で実践する看護技術として認識でき、臨地実習未経験であっても、看護師の役割を理解し、臨床場面がイメージされたことで学習意欲にも効果的に働くことが報告されていた(11・16)。

《現在の看護実践の場の理解》と《基本手技の習得》の両方を教授方略のねらいとした演習では、看護師参加型の演習が行われ、看護技術の原理・原則の修得や臨床での看護技術の適用場面や患者への配慮を学習することができる一方で、課題として原理・原則を踏まえた応用であっても、教員と臨床看護師の教育内容が違ふと学生が捉える可能性があることが報告されていた(24)。

《基礎看護技術の個別性への適用》と《現在の看護実践の場の理解》の両方を教授方略のねらいとした演習では模擬患者・看護師参加の演習が行われていた。模擬患者へのケアを通して患者に適したケアを工夫す

ることや患者の視点に立つことの重要性を学ぶことができるだけでなく、看護師からのフィードバックを受けることで臨地実習に近い演習を体験し、専門職として判断の大切さや自分の理解不足、技術不足を感じることができる」と報告されていた(25)。

《臨床に近い状況での知識・技術・思考の統合》を教授方略のねらいとした演習では、パフォーマンス評価を用いた演習を行い、実施した内容をパフォーマンス評価により評価することで、フィードバックを通して自己に不足している点を認識できると報告されていた(4)。

表1 基礎看護技術演習の教授方略に関する文献リスト

No. 投稿年	タイトル	著者
1 2020	アクティブ・ラーニング型反転授業を導入した基礎看護技術演習科目の評価とその課題 車椅子移動単元科目における中間評価	玉川 優芽, 福岡 美紀, 宮本 まゆみ, 他
2 2020	臨地実習に向けたシミュレーション教育の試み 看護師への報告	鈴木 彩加, 佐居 由美, 加藤木 真史, 他
3 2019	ICTを活用した看護技術教育についてNursing Skill Education using ICT	徳永 基与子
4 2019	基礎看護技術演習におけるパフォーマンス評価の導入	児玉 悠希, 菅浦澤 幸子, 舟越 五百子, 他
5 2019	臨地実習場面を想定したシミュレーション学修 初回訪室時の環境整備と観察	樋藤 彩子, 佐居 由美, 加藤木 真史, 他
6 2019	基礎看護学実習に向けて実習病院との協働を目指した取り組み 臨地実習指導者参加型の教育方法を用いた基礎看護技術演習の試み	小栗 祐子, 佐久間 あゆみ, 吉田 千鶴, 他
7 2019	基礎看護技術演習に臨地実習指導者が参加したことによる1年次前期の学生に及ぼす影響	佐藤 亜月子, 小栗 祐子, 志田 久美子, 他
8 2019	ICT(ナーシングスキル、タブレット型端末)を活用した基礎看護技術の学習支援の実際 環境調整技術における活用	小川 明佳, 大谷 則子
9 2018	基礎看護技術演習における体験を取り入れた演習前課題の意義	増田 富美子
10 2018	ブレンディッドラーニングを用いた基礎看護技術の授業を試みて ベッドメイキングの単元を事例として	山住 康恵), 櫻井 美奈, 中村 昌子, 他
11 2017	基礎看護技術演習に臨床指導者が参加することの効果 学生の学びと臨床指導者の反応から	神宮寺 陽子, 横山 なぎさ, 蛭子 真澄
12 2017	主体的学修を促す基礎看護技術演習における学ぶ意識と行動の現状 〈自己学習-グループ学習-個別指導-自己評価〉システムを導入して	河野 かおり, 板倉 朋世, 遠藤 恭子, 他
13 2017	基礎看護技術教育での学生の学びの深まりを促す教育的介入策を探る 振り返り用紙の分析	網木 政江, 久野 暢子, 藤澤 伶子
14 2017	看護技術オンラインツール(ナーシング・スキル)の活用の実際	小川 明佳, 牧野 美幸, 大谷 則子, 後藤 奈津美, 他
15 2016	基礎看護技術の授業におけるインストラクショナルデザイン ARCSモデルによる授業分析と課題	重年 清香, 真嶋 由貴恵
16 2016	臨床看護師のサポートを受けた基礎看護技術演習での学生の学びと継続に向けた課題	山本 加奈子, 吉田 和美
17 2016	達成感を考慮した基礎看護技術「胸骨圧迫法」の授業方法 コーチング・フロー下野流学習サイクルの効果	中村 昌子
18 2016	基礎看護技術の修得に共通の一事例を用いた教育方法の学修効果	鷗沢 淳子, 有家 香, 佐久間 夕美子, 他
19 2016	共通一事例を用いた基礎看護技術における講義・演習の教育効果の検討	有家 香, 鷗沢 淳子
20 2015	シミュレーション教育を用いた基礎看護技術演習の評価	伊藤 朗子, 富澤 理恵, 山本 直美, 他
21 2015	基礎看護技術における食事援助に関する学生の学び	山本 智恵子, 吉田 美穂, 田澤 茉莉奈, 他
22 2014	一般住民ボランティアによる模擬患者(Simulated Patient)参加の 基礎看護技術演習における学生の学び	小栗 祐子, 志田 久美子, 長谷川 ゆり子, 他
23 2014	看護実践能力を育てるための日常生活援助技術演習の展開	竹内 貴子, 中島 佳緒里, 前田 節子, 他
24 2014	臨床看護師との協働による看護技術教育の学生による評価	竹下 美恵子, 滝内 隆子, 小松 妙子, 他
25 2012	当大学看護学科における模擬患者参加型授業の実際	井上 京子, 山田 香, 南雲 美代子, 寺島 美紀子, 遠藤 恵子, 沼澤 さとみ, 青木 実枝, 竹原 敦, 神先 秀人, 前田 邦彦
26 2011	事例を取り入れた基礎看護技術演習で学生が感じたこと 自分達で考える演習を通して	小林 廣美, 佐藤 静代
27 2011	基礎看護技術習得に向けた看護学生の自己学習 プレテストとチェックリストを導入して	久田 雅紀子, 種田 ゆかり, 井村 香積

表2 基礎看護技術演習の教授方略とその効果・課題

教授方略	効果と課題
看護師参加型の演習	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学んでいる看護技術を臨床で実践する看護技術として認識できる。 ・看護を実践することに対して関心や課題を持ち、学習意欲に効果的に働く。 ・看護技術の教科書にはない具体的なコツや工夫を学べる。 ・看護師としての心構えにつながる。 ・看護技術が自分中心の動作ではないことを学べる。 ・臨床実習未経験であっても、看護師の役割を理解しつつ、技術の活用実際の場面まで学ぶことができる。 ・基礎と応用を区別した上で、基礎を身に付ける大切さの実感することができる。 ・実際に技術を患者に提供する際のヒューマン・ケアリングな関わりについて学んでいる。 ・臨床場面がイメージされ看護師としての心構えができる。 ・学内での技術演習を実際の臨床場面において活用できるものとして位置づける機会になっている。 ・看護技術の原理・原則の修得や臨床での看護技術の適用場面や患者への配慮を学習することができる。 ・看護技術の臨床における適応場面や患者への配慮など、臨床現場をイメージさせることで、学生に将来の目標を再認識させることになった。 ・臨床での具体的な場面や事例のイメージ化を行い、現場のリアル感や専門家への尊敬をとおして自己の将来へと繋げられる。 ・看護師に技術に関する実践的なアドバイスを受けながらロールモデルとなる。 ・看護師に対する「怖い」というイメージが「安心」へと変化した。 ・看護師への憧れを抱く。 ・自己を振り返り、課題を認識する。 ・臨床で実践されている看護へ興味をもち、臨床で実践の方法に着目する。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全員が指導者と平等にかかわることができない。 ・指導者に質問しづらい場合がある。 ・看護技術における原理・原則を踏まえた応用であっても、教員と臨床看護師の教育内容が違うと学生が捉える可能性がある。
模擬患者と看護師参加型の演習	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者の視点に立つことの重要性を学ぶ。 ・自分以外の学生が目前で繰り広げる模擬患者との対応を親ながら、互いに自分の観察不足や配慮不足を実感し、学びを共有できる。 ・学習への動機づけになっている。 ・臨床指導者のフィードバックを受けて、自分の理解不足、技術不足を感じるができる。 ・臨床実習に近い演習を体験し、専門職として判断し介入することの重要性を学ぶ。 ・患者の個性に注目した対応の必要性を学んでいた。 ・患者の反応を見て、患者の意思を確認しながら、患者に適したケアを工夫することの重要性を学ぶことができた。 ・コミュニケーションの重要性にも気づくことができた。
模擬患者を用いたシミュレーション演習	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生同士で学んだ看護技術を、ノンテクニカルスキルを交えて臨床へより適用できる技術へ改善できる。 ・学生同士のロールプレイでは得ることが難しい患者に合わせて行う実践的な学びを得られていた。 ・言語的コミュニケーションだけでなく、目線や声のトーン、表情といった非言語的コミュニケーションを捉え、患者の様々な心情を推察するなどの臨場感ある学びを得られる。 ・1年次の早い時期に実施することは、専門職業人としての意識の向上に繋がる。 ・1年次での基礎看護技術教育方法として、コミュニケーション能力の向上に繋がり、さらに患者理解を深める。 ・患者のイメージを体系的にさらに個性のある患者理解に繋がる教育方法として効果が高い。 ・模擬患者の経験が語られることによって、学生が模擬患者の心情に近づき、学生の解釈による疑似体験が得られた。この疑似体験が、「考える」という学びの深化に繋がった。
ロールプレイによる演習	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・看護師、患者役を通して日常生活であまり意識していないことを意識しながら体験をすることで、個性のある援助を考える必要性を気づかせることができる。 ・専門知識の重要性について具体的に学べる。 ・看護師としての基本的な態度に関する学びが得られる。 ・援助を受ける患者の気持ちを理解することができる。 ・学生が対象の状況を捉えて援助を考えられるようになる。 ・観察役を置くことで客観的に実施手順やその内容が評価でき、説明や方法が妥当であったのか学生の視点で気づくことができる。 ・演習を重ねることでグループで看護師役の視点、患者役の体験、評価役の視点で話し合わせ、よりよい方法を検討することができる。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康な学生が患者役をするため、機能の障害に合わせた援助については学びが少ない。 ・事前学習で事例の患者の援助方法について計画してきたことを実践するため、患者役の機能や障害のアセスメントについては見られなかった。
事例を基に援助を実施する演習	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者の個性を大切に援助の必要性、実施にあたっての観察やエビデンスの必要性、自立を踏まえながら安全・安楽に実施することの原則を学んでいる。 ・患者への配慮の必要性を学んでいる。 ・援助にあたって一生懸命になり過ぎて患者のことを忘れていたり、知識不足・技術不足を認識する機会となる。
複数の看護技術項目で共通の事例をチームで展開する演習	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象者を繰り返し振り返ることでイメージしやすくなり、対象者に配慮した安全・安楽な看護技術を考える上で学修に効果的である。 ・共通の事例とその事例に基づいた視聴覚教材の併用は、学生の外的他者意識へと働きかけ学修に効果的に働く。 ・協同学修することで様々な意見を取り入れ、知識の中に活かしたことで協同作業の有用性をより強く感じる。 ・共通の事例を用いた講義・演習、更にDVD教材を用いて知識の確認をしたことは対象者や看護師の心理面に関する学びに効果的である。 ・患者を家族やその周辺事象を含めてイメージできるようになり、患者をリアリティのある「人」として捉えた援助方法に思考をめぐらせることができる。 ・援助技術の原理原則に患者の状況を織り交ぜて患者の状態に合わせた援助内容へと思考を繋げる事ができる。 ・患者の全体像をイメージし患者の気持ちを想像し患者の気持ちに寄り添った援助のあり方へと思考をめぐらせることができる。

<p>ブレンディッドラーニングによる演習</p>	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンラインツールによる映像の視聴は、初めて実施する看護技術に対しイメージをつけるために有効である。 ・自己学習でオンラインツールを活用し、学生が自らの技術を再評価することで反復練習のモチベーションにつながると共に、患者の視点に立った援助技術へと発展させることができていた。 ・課題の動画を撮影することで実施者、補助者、撮影者で見直し、自己の技術をリフレクションできるだけでなく、お互いの実技を評価しあうことで得る学びも多い。 ・「予習－講義－復習－演習－自己練習」の習得サイクルによる学習に導くことができる。 ・自分が実施している動画を繰り返し視聴することで体の使い方を意識して自己練習に取り組むことができる。 ・看護技術に関連する講義のより深い理解が得られる。 ・オンラインツールによる映像の視聴により習得しようとする技術について具体的なイメージ化ができる。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員の課題の出し方によってオンラインツールの視聴回数が異なる。 ・手順をオンラインツールの内容を書き写すだけの学生があり、自ら考えて手順書を作成することを促す働きかけが必要である。
<p>ICTによる学習支援を活用した演習</p>	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・反転授業や学習コンテンツによる学習支援が可能となる。 ・仮想空間での多人数の意見効果や相互評価も可能である。
<p>アクティブ・ラーニング型反転授業</p>	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら学ぶ意思が高まることにより主体的学習の効果が期待できる可能性が示唆された。 ・学業成績の改善には至らないものの、技術の習得には従来型授業に劣らない。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・協同学習を行うための学習が不足した。 ・他者へ教えることが深い理解を表すが、それに至らない学生もいる。
<p>〈自己学習－グループ学習－個別指導－自己評価〉システムによる演習</p>	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・約半数の学生は、1時間以上2時間未満の自己学習を行って授業に臨み、ほとんどの学生がグループで計画立案して演習を進めることができる。 ・時間を短縮しポイントを絞った講義では、ほとんどの学生が「基礎的な知識を理解できた」と感じれる。 ・技術チェックでは、自己および他者の看護援助場面から気づきがあり、学生のほぼ全員がそれを他者に伝えることができ、他者からの意見を役立てられた。
<p>段階的に行う演習</p>	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学んだ技術を活用しながら、技術の簡単な要素から複雑な要素へスモールステップすることで※ARCSモデルにおける技術の<R 関連性>を理解する機会や、技術の上達における<C:自信>を実感する機会になり、学習意欲が維持向上する。 ・<S:満足感>の方略は用いていなくても他の方略で満足を得ることができる。 ・看護らしいことを学んだと実感し学習意欲が継続する。 <p>※ARCSモデル 教育工学者ジョン・M・ケラーによって提唱された学修の意欲に関するモデル</p>
<p>事前課題に体験を取り入れた演習</p>	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者の状況の理解がされ、援助計画に反映される。
<p>振り返り用紙を活用した演習</p>	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己課題を見出すことにつながる。 ・その日に学習した技術を既習の知識と関連付け、臨床での活用場面まで考えるとともに、自己の学習姿勢・態度についても客観的に自己評価し、知識・技術・態度の包括的視点から振り返ることができる。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己の振り返りの視点は、技術面(精神運動領域)に大きく偏っており、包括的視点(認知領域、情意領域、精神運動領域)での振り返り思考になっていなかった。 ・自己課題を明確にすることでできない学生もおり演習の振り返り方法を見直す必要がある。
<p>動画による振り返りを行う演習</p>	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・演習開始前後の自己の技術実施動画を比較させ学生に達成感を感じさせることができる。 ・自己の技術実施動画と模範動画を基に振り返りながら正確な動作の習得に効果的である。
<p>ブレテストとチェックリストを取り入れた演習</p>	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブレテストの準備として、多くの学生が講義開始前に予習を行っていた。 ・チェックリストに手技の根拠を示す項目を記入するようにしたこと多くの学生が技術の根拠を理解するためのベースとなる知識の確認や、演習の大まかな手順をイメージした上で講義を受講することが出来た。
<p>パフォーマンス評価を用いた演習</p>	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・パフォーマンス評価によるフィードバックにより自己に不足している点を認識できる。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に看護師として働く環境、場面を想定した課題の揭示が必要である。 ・パフォーマンス課題の評価方法を作成する必要がある。
<p>実習場面を想定したシミュレーション演習</p>	<p><効果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習前の準備状態を高め実践能力の向上につながると+A1 B12考えられた。 ・学生の実習前準備となり、臨床での観察力を深め、看護実践力を高めることにつながる。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・病棟実習とは環境が異なるため実習に生かせない場合もある。 ・学内演習と臨床場面の違いがあることで戸惑い、学びを活かすことができない学生もいる。

表3 基礎看護技術演習の教授方略とそのねらい

カテゴリ	教授方略のねらい	教授方略
へ 看護 技術 の 実 践 へ の 応 用 へ	《基礎看護技術の個別性への適用》	複数の看護技術項目で共通の一事例をチームで展開する演習
		模擬患者を用いたシミュレーション演習
		ロールプレイによる演習
	《現在の看護実践の場の理解》	事例を基に援助を実施する演習
	《現在の看護実践の場の理解》	看護師参加型の演習
	《基本手技の習得》	看護師参加型の演習
	《現在の看護実践の場の理解》 《基礎看護技術の個別性への適用》	模擬患者と看護師参加型の演習
へ 看護 技術 修 得 へ	《看護技術の視覚的理解》	パフォーマンス評価を用いた演習
		ブレンディッドラーニングによる演習
	《看護の基盤的理解》	動画による振り返りを行う演習
	《効率的、効果的な看護技術の修得》	事前課題に体験を取り入れた演習
へ 主 体 的 学 習 の 育 成 へ	《主体的学修能力》	ICTによる学習支援を活用した演習
		アクティブ・ラーニング型反転授業
	《自己教育力の育成》	〈自己学習ーグループ学習ー個別指導ー自己評価〉 システムによる演習
	《自己学習姿勢の育成》	振り返り用紙を活用した演習
へ 看護 への モチ ベ ー シ ョ ン 向 上 へ	《看護師イメージの具体化》	ブレテストとチェックリストを取り入れた演習
	《学習意欲の向上》	看護師参加型の演習
へ 実 習 の レ ディ ネス 強 化 へ	《実習のレディネス》	段階的に行う演習
		実習場面を想定したシミュレーション演習

3. <看護技術の修得>について

《看護技術の視覚的理解》を教授方略のねらいとした文献が5件、《看護の基盤的理解》が1件、《効率的・効果的な看護技術の習得》が1件であった。

《看護技術の視覚的理解》を教授方略のねらいとした演習では、ブレンディッドラーニングによる演習と、動画による振り返りを行う演習が行われていた。

ブレンディッドラーニングによる演習の効果として、事前課題としてオンライン上の動画を視聴することで修得しようとする技術について具体的にイメージでき、看護技術に関連する講義のより深い理解が得られ、チェックリストを活用し、学生が自らの技術を再評価することで反復練習のモチベーションにつながると報告されていた(8・10)。一方で、課題の出し方によってオンラインツールの視聴回数に差があることが報告されていた。さらに、看護技術実施の動画を学生に撮影、提出させることにより、自分が実施している動画を繰り返し視聴することで体の使い方を意識して自己練習に取り組むことができていた。実施者、補助者、撮影者で見直し、自己の技術をリフレクションでできるだけでなく、お互いの実技を評価しあうことで得る学びも多いと報告されていた(14)。

動画による振り返りを行う演習の効果として、演習開始前後の自己の技術実施動画を比較させ学生に達成感を感じさせることができながら正確な動作の修得に効果的であることが報告されていた(17)。

《看護の基盤的理解》を強化のポイントとした演習では、事前課題に患者体験を取り入れて演習を行うことで患者の状況の理解がなされ、援助計画に反映されることが報告されていた(9)。

《効率的・効果的な看護技術の修得》を強化のポイントとした演習では、ICTによる学習支援を活用した演習を計画し、経時的に改善しながら行っていたが、効果については述べられていなかった(3)。

4. <主体的学修>について

《主体的学修能力》を教授方略のねらいとした文献が2件、《自己教育力の育成》が1件、《学習意欲の向上》と《自己学習姿勢の育成》の両方が1件であった。

《主体的学修能力》を強化した演習では、アクティブ・ラーニング型反転授業と自己学習-グループ学習-個別指導-自己評価システムによる演習が行われていた。

アクティブ・ラーニング型反転授業の効果として、自立的に学習できたと多くの学生が感じ、自ら学ぶ意思が高まることにより主体的学修が期待できる可能性が示唆され、学業成績の改善には至らないものの、技術の修得には従来型授業に劣らないことが報告されていた。一方で、協同学習を行うための学習が不足することや、他者へ教えることが深い理解に至らない学生もいることが課題とされていた(1)。

自己学習-グループ学習-個別指導-自己評価システムによる演習の効果として、約半数の学生が自己学習を行って授業に臨み、ほとんどの学生がグループで計画立案して演習を進めることができていた。さらに自己学習を前提に時間を短縮しポイントを絞った講義では、ほとんどの学生が「基礎的な知識を理解できた」と感じていたことが報告されていた(12)。

《自己教育力の育成》を教授方略のねらいとした演習では、振り返り用紙を活用した演習が行われていた。振り返り用紙を活用することで、その日に学習した技術を既習の知識と関連付け、臨床での活用場面まで考えるとともに、自己の学習姿勢・態度についても客観的に自己評価し、知識・技術・態度の包括的視点から振り返ることができ、自己課題を見出すことにつながると報告されていた(13)。

《自己学習姿勢の育成》を教授方略のねらいとした演習では、プレテストとチェックリストを取り入れた演習が行われていた。プレテストの準備として、多くの学生が講義開始前に予習を行っていた。また、チェックリストに手技の根拠を示す項目を記入するようにすることで多くの学生が技術の根拠を理解するためのベースとなる知識の確認や、演習の大まかな手順をイメージした上で講義を受講することができ、各演習において技術の根拠を意識するようになると報告されていた(27)。

5. <看護へのモチベーション>について

《看護師イメージの具体化》を教授方略のねらいとした文献が2件、《学習意欲の向上》が1件であった。

《看護師イメージの具体化》を教授方略のねらいとした演習では、看護師参加型の演習が行われていた。看護師が演習に参加することで、学生は看護師に対する「怖い」というイメージが「安心」へと変化し、看護師から技術に関する実践的なアドバイスを受けるとしてロールモデルとなっていた。そして臨床で実践されている看護へ興味をもち、臨床での実践方法に着目

し、自己を振り返り、課題を認識することができる」と報告されていた(6・7)。

《学習意欲の向上》を教授方略のねらいとした演習では、段階的に行う演習が行われていた。学んだ技術を活用しながら、技術の簡単な要素から複雑な要素へスモールステップで学修することでARCSモデルにおける技術の<R: 関連性>を理解する機会や、技術の上達における<C: 自信>を実感する機会になり、学習意欲が維持向上することが報告されていた(15)。

6. <実習のレディネス>について

《実習のイメージ化》を教授方略のねらいとした文献は2件であり、実習場面を想定したシミュレーション演習が行われていた。

実習場面を想定したシミュレーション演習の効果として、実習前の準備状態を高めることができ、臨床での観察力を深め、看護実践力を高めることにつながるということが報告されていた。一方で、学内演習と臨床場面の違いがあることで戸惑い、学びを活かすことができない学生もいることや病棟実習とは環境が異なるため実習に生かせない場合もあることが課題として報告されていた(2・5)。

V. 考察

1. 抽出された教授方略の工夫の特徴

本研究の結果から、各看護系大学の基礎看護学領域では第4次改正カリキュラムの主旨に沿った臨床の看護実践場面を想定した演習を行っていることが明らかになった。

臨床の看護師が参加した演習により学生は、現場のリアリティを感じることで看護師イメージが具体化されていた。看護教育の内容と方法に関する検討会報告書⁷⁾では「認定看護師や専門看護師など、学生の目標につながるような看護師と学生が関われるよう、講義や演習を設定することにより、学習の動機付けになることが考えられる。」とある。本研究では、臨床の認定看護師や専門看護師ではないが、臨床の看護師が参加した演習により学生は、現場のリアリティを感じることで看護師イメージの具体化もされ、看護師が参加する演習を行うことで学生の看護へのモチベーションを高める工夫がなされていたことが明らかになった。

さらに、オンラインツールを活用したブレンディッドラーニングや事前事後課題を設定した演習を行うことで、自ら学ぶ力の育成にも取り組んでいた。2012年

に文部科学省中央教育審議会⁸⁾は学士課程の教育について「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、双方向の授業をすることや、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である」としている。このことに関連して、本研究結果では、基礎看護学においてもオンラインツールを活用したブレンディッドラーニングや事前事後課題を設定した演習を行うことで、主体的学修の強化がなされていることが伺えた。

本研究の結果として、臨床現場のリアリティを意識させ、アクティブラーニングやICTの活用による主体的な学習、シミュレーションの活用による学習意欲の向上などの実態が把握できた。したがって教員は、オンラインツールの活用や、事前事後課題を設定し、看護師や模擬患者が参加した演習を行うなど、それぞれの演習方法の特徴を生かし、組み合わせることで看護実践能力の教育効果を上げられるように工夫することが重要であると考ええる。

2. 基礎看護技術演習の教授方略の課題について

看護基礎教育検討会⁹⁾では、看護師養成所の卒業時の約4割が、第4次改正カリキュラムで看護実践能力が上昇したと報告されている。一方で、本研究では様々な演習が行われる中、「教員の課題の出し方によってオンラインツールの視聴回数が異なる」、「演習の振り返り方法を見直す必要がある」、「協同学習を行うための学習が不足した」など教員の教授方略に関する準備不足についても報告されていた。より効果的に看護実践能力を上昇させるためには、様々な教授方略を用いた工夫をすることは重要であるが、それを十分活用するための準備が肝要であると考ええる。また、同じ教授方略のねらいであっても評価の方法が異なり、演習の評価方法やその指標などを調査していく必要があると考ええる。

2022年からは、次のカリキュラムでの看護基礎教育がスタートする。看護基礎教育検討会報告書¹⁰⁾では「基礎看護学では、臨床判断能力や看護の基盤となる基礎的理論や基礎的技術、看護の展開方法等を学ぶ内容としシミュレーション等を活用した演習を強化する内容とする。」とされ、さらなる演習の強化が求められている。また次の時代の演習を計画していくためにも、今回の研究結果を活用するとともに、教員各自が研究的視点をもって演習を計画し、その実践報告を蓄積していくことが必要であると考ええる。

VI. 結論

第4次改正カリキュラムとなった2009年以降に看護系大学において行われた基礎看護技術演習に関する27件の文献を分析した結果、以下のことが明らかとなった。

1. 基礎看護技術演習の教授方略のねらいは<看護技術の実践への応用><看護技術の修得><主体的学習><看護へのモチベーション><実習のレディネス>であった。

2. 学生が看護へのモチベーションを高める工夫や、主体的学修の強化が行われていた。

技術の基礎的な修得から実践を想定した応用の段階までを網羅していたこと、直接学生の看護実践能力の強化を試みているだけでなく、学生の学修のレディネス強化を図ることで看護実践能力の強化を行っていた。それぞれの演習方法の特徴を生かし、組み合わせることで看護実践能力の教育効果を上げられるようにしていくことが重要であることが示唆された。

3. 教員の教授方略に関する準備不足についての報告もあり、様々な教授方略を用いた工夫をするだけでなく、それを十分活用するための準備が必要であることが示唆された。

開示すべきCOI関係にある企業・組織及び団体などはありません。

本論文の一部は、2021年度第23回日本看護医療学会学術集会で発表した。

VII. 引用文献

1) 厚生労働省(2003. 3.17). 看護基礎教育における看護技術教育のあり方に関する検討会報告書
< <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html>>

2) 茂野香おる：基礎看護技術Ⅰ 系統看護学講座 基礎看護学2, 第16版, 医学書院, 2-15, 2015.

3) 厚生労働省(2019.10.15). 看護基礎教育検討会報告書

< <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>>

4) 厚生労働省(2007. 4.16) 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書

< <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>>

5) 杉森みどり：看護教育学, 第7版, 医学書院, 254, 2021.

6) 浅川和美：基礎看護技術教育に関する現状と課題 2004年～2010年に発表された基礎看護技術教育研究の分析, 山梨大学看護学会誌, 9(2), 1-6, 2011.

7) 厚生労働省(2011. 2.28). 看護教育の内容及方法に関する検討会報告書

< <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r985200001316y-att/2r985200000131bh.pdf>>

8) 文部科学省(2012.10. 4). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)

< https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf>

9) 厚生労働省(2018. 4.12). 看護基礎教育検討会第1回 看護基礎教育検討会. 資料4. 第4次カリキュラム改正の評価【第四次カリキュラム改正後の学生の「卒業時の看護実践能力」の変化】

< <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000203416.pdf>>

10) 前掲3)

